

玉ネギ

大網経済センター 営農指導員 山老 秀昭



農作業

テクニカルダイアリー



イチゴ

やさいの里営農センター 営農指導員 石川 貴洋

●**腐敗病**
腐敗病は枯れた葉や傷口等から細菌が侵入して感染します。春先に温度が上昇してくると、葉の枯れや腐る症状が発生します。軟腐病と似ていますが、比較的低温期から発生することや、

●**べと病**
べと病は湿度が90%以上、気温が10〜20℃(最適温度は15℃)の温度条件を好みます。条件がそろえば数時間で発病し、感染が非常に速いという特徴があります。

●**タネバエ**
幼虫が鱗茎に侵入し食害するため、根が伸びず葉がしおれ、食害を受けた鱗茎は腐敗します。また、タネバエの成虫は腐ったものに寄っていく傾向があるため、発生が多い圃場では、播種時や定植時に牛糞・鶏糞等の有機質肥料の多用を避けましょう。

●**ネギアザミウマ**
雨が少なく乾燥傾向の場合、多発するため注意が必要です。成虫は体長1ミリの褐色で細長く、幼虫は体長1ミリ以下で黄色く細長いのが特徴です。成虫、幼虫ともに食害を行い、食害痕は「かすり状の白班」となり、多発すると葉全体が白化し、生育抑制や枯死を引き起こします。発生状況に応じ、7〜10日間隔での防除が必要です(表④参照)。

●**病害虫対策について**
軟腐病ほど悪臭を伴わないことなどで区別ができます。発生した株は周囲の感染源になるので放置せず、早めに圃場の外に抜き取ってください。

●**うどんこ病の防除**
うどんこ病(写真②③)は、葉や果実などに、白い粉状の病斑を発生させます。7〜8月の高温期には菌の活動が抑えられ、いったん発生が減少しますが、9月以降、気温の低下とともに再び菌の活動温度となり、発生が増加します。

●**べと病**
べと病は湿度が90%以上、気温が10〜20℃(最適温度は15℃)の温度条件を好みます。条件がそろえば数時間で発病し、感染が非常に速いという特徴があります。

●**タネバエ**
幼虫が鱗茎に侵入し食害するため、根が伸びず葉がしおれ、食害を受けた鱗茎は腐敗します。また、タネバエの成虫は腐ったものに寄っていく傾向があるため、発生が多い圃場では、播種時や定植時に牛糞・鶏糞等の有機質肥料の多用を避けましょう。

●**ネギアザミウマ**
雨が少なく乾燥傾向の場合、多発するため注意が必要です。成虫は体長1ミリの褐色で細長く、幼虫は体長1ミリ以下で黄色く細長いのが特徴です。成虫、幼虫ともに食害を行い、食害痕は「かすり状の白班」となり、多発すると葉全体が白化し、生育抑制や枯死を引き起こします。発生状況に応じ、7〜10日間隔での防除が必要です(表④参照)。

●**うどんこ病の防除**
うどんこ病(写真②③)は、葉や果実などに、白い粉状の病斑を発生させます。7〜8月の高温期には菌の活動が抑えられ、いったん発生が減少しますが、9月以降、気温の低下とともに再び菌の活動温度となり、発生が増加します。

●**病害虫対策について**
軟腐病ほど悪臭を伴わないことなどで区別ができます。発生した株は周囲の感染源になるので放置せず、早めに圃場の外に抜き取ってください。

●**うどんこ病の防除**
うどんこ病(写真②③)は、葉や果実などに、白い粉状の病斑を発生させます。7〜8月の高温期には菌の活動が抑えられ、いったん発生が減少しますが、9月以降、気温の低下とともに再び菌の活動温度となり、発生が増加します。

●**病害虫対策について**
軟腐病ほど悪臭を伴わないことなどで区別ができます。発生した株は周囲の感染源になるので放置せず、早めに圃場の外に抜き取ってください。

●**うどんこ病の防除**
うどんこ病(写真②③)は、葉や果実などに、白い粉状の病斑を発生させます。7〜8月の高温期には菌の活動が抑えられ、いったん発生が減少しますが、9月以降、気温の低下とともに再び菌の活動温度となり、発生が増加します。

●**病害虫対策について**
軟腐病ほど悪臭を伴わないことなどで区別ができます。発生した株は周囲の感染源になるので放置せず、早めに圃場の外に抜き取ってください。

●**うどんこ病の防除**
うどんこ病(写真②③)は、葉や果実などに、白い粉状の病斑を発生させます。7〜8月の高温期には菌の活動が抑えられ、いったん発生が減少しますが、9月以降、気温の低下とともに再び菌の活動温度となり、発生が増加します。

表③ 玉ネギに登録のある殺菌剤

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数	対象病害	作用特性
ジマンダイセン水和剤	400〜600倍	3日前まで	5回以内	べと病、灰色かび病、白色疫病、黒斑病ほか	予防
ダコニール1000	1000倍	7日前まで	6回以内	べと病、灰色かび病、白色疫病	予防
プロボーズ顆粒水和剤	1000倍	7日前まで	3回以内		予防・治療
ランマンフロアブル	2000倍	7日前まで	4回以内	べと病、白色疫病	予防
パリダシン液剤5	500倍	3日前まで	5回以内	腐敗病、軟腐病	予防・治療

表④ 玉ネギに登録のある殺虫剤

薬剤名	使用基準	使用時期	使用回数	対象虫害
ダイアジノン粒剤5	3〜5kg	播種時または定植時	2回	タネバエ、タマネギバエ
ディアナSC	2500〜5000倍	前日まで	2回	ネギアザミウマ、ヨトウムシ、ネギハモグリバエ
ファインセーブフロアブル	1000〜2000倍	3日前まで	3回	ネギアザミウマ
モスピラン顆粒水溶剤	2000倍	7日前まで	3回	

6月の分析経過について

合計2点	
多成分一斉分析	×
残留農薬分析点数	×
メロン	1点
カボチャ	1点
土壌診断点数	合計108点

※残留農薬分析において、基準値を上回る成分は検出されませんでした。

「営農情報メール」配信中! **登録無料!!**

作柄情報 病害虫対策 青果物概況 イベント案内 など

◆登録は、右のQRコードまたはJA山武郡市のホームページから!(スマートフォンもしくはパソコンのメールアドレスをご登録ください。)

◎JA山武郡市の組合員なら、どなたでも登録できます!!

最新情報をお届けします

表① ハダニの薬剤

薬剤名	希釈倍率	使用時期	総使用回数	天敵への影響			
				スパイカルEX		スパイデックス	
				影響	残効	影響	残効
スターマイトフロアブル	2000倍	前日まで	2回	◎	0	◎	0
ニッソラン水和剤	2000〜3000倍	前日まで	2回	◎	0	◎	0
マイトコーネフロアブル	1000倍	前日まで	2回	◎	0	◎	0
サフオイル乳剤*	300〜500倍	前日まで	—	○〜△	1	○〜△	1
NEW ダニオーテフロアブル	2000倍	前日まで	2回	◎	0	◎	0

※天敵への影響はあくまで目安なので、気象条件等により変動します。
*散布頻度や希釈倍率、散布液量、環境条件等で変わってくる可能性があります。天敵放飼後の全面散布は避け、スポット散布で対応してください。薬液乾燥後は影響がありません。



写真① ハダニの被害



写真② うどんこ病(果実)

うどんこ病(写真②③)は、葉や果実などに、白い粉状の病斑を発生させます。7〜8月の高温期には菌の活動が抑えられ、いったん発生が減少しますが、9月以降、気温の低下とともに再び菌の活動温度となり、発生が増加します。

一度発生すると薬剤による治療は難しいので、予防散布を徹底しましょう(表②参照)。発生した際は、1週間ごとに薬剤を散布してください。薬液は葉の裏にもよくかかるよう、丁寧に洗い流すように散布しましょう。発病した株は伝染源になりますので、必ず抜き取り、圃場外で処分してください。

うどんこ病(写真②③)は、葉や果実などに、白い粉状の病斑を発生させます。7〜8月の高温期には菌の活動が抑えられ、いったん発生が減少しますが、9月以降、気温の低下とともに再び菌の活動温度となり、発生が増加します。

うどんこ病(写真②③)は、葉や果実などに、白い粉状の病斑を発生させます。7〜8月の高温期には菌の活動が抑えられ、いったん発生が減少しますが、9月以降、気温の低下とともに再び菌の活動温度となり、発生が増加します。

表② うどんこ病の薬剤

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数	作用特性
ベルコートフロアブル	1000倍	育苗期(定植前)	5回以内	予防
フルピカフロアブル	2000〜3000倍	収穫前日まで	3回以内	予防
パンチョTF顆粒水和剤	2000倍	収穫前日まで	2回以内	予防・治療
ショウチノスケフロアブル	2000倍	収穫前日まで	2回以内	予防・治療

※「フルピカフロアブル」と「ショウチノスケフロアブル」は同一成分を含むので、使用回数に注意してください。



写真③ うどんこ病(葉)